

木喰の故郷へ 自筆資料の発見

その年の六月九日、柳は木喰調査のために再び山梨を訪れます。この間、柳と小宮山は手紙のやりとりを続け、小宮山が集めた木喰に関する情報が柳にもたらされていました。その情報をもとに、柳は木喰の故郷である丸畑を訪ね、木喰自身が記した『四国堂心願鏡』や『南無阿弥陀仏国々御宿帳』など、木喰研究を進める上で重要となる資料を見つけることができたのです。この時の調査では、永寿庵『五智如来像』や山之神社『山神像』などの木喰仏も発見されています。一方、木喰が丸畑に建立した四国堂とその安置仏は既に散逸してしまっていることもわかったのです。

さらに一ヵ月後、七月三日に再び丸畑を訪れた柳は、同行した小宮山や石部惟三らの力添えにより、木喰の自筆資料を借り受けることができました。こうして、柳の木喰研究はいよいよ本格的に深まることとなったのです。

木喰仏を求めて

柳による木喰仏探案の旅は大正三年（一九二四）八月から精力的に行われました（年譜参照）。調査は新潟や四国・九州など広範囲にわたるもので、一年にも満たないわずかな期間に三五〇体に及ぶ木喰仏が発見されました。今とはくらべものにならないほど不便な当時の交通事情を考えれば、驚異的な行動力と言えます。さらに調査を始めて間もない大正三年九月には、『木喰五行上人の研究』（第二回）を『女性』に発表し、丸畑で発見された『四国堂心願鏡』の内容などについて紹介しています。柳のこうした活動を通して、木喰は全国的に知られていくこととなるのです。

木喰五行研究会の発足

柳がこれほどに精力的な調査を行うことができた背景には、木喰仏が伝わる地域の郷土史家など協力者の存在と尽力がありました。山梨では、大正三年夏頃から木喰に関する記事が頻繁に『山梨日日新聞』に掲載され、木喰のことや柳らによる調査の様子が広く報じられるようになっていきます。柳の言葉を書き留めれば、『幕末に於ける最大の彫刻家』（『木喰五行上人の研究』）である木喰に多くの人が関心を寄せたのでしよう。柳の調査をきっかけに木喰仏発見への気運が全国的に高まった様子は、新潟や宮崎など、木喰仏が見つかった地域の新聞でその様子が報道されていることからもうかがい知ることができます。

そうした状況の中、同年二月二九日には『木喰五行研究会』が山梨で発足することとなります。柳から、調査が広範囲に及び必要な経費も増えてくることについて相談を受けた小宮山は、研究会の設立を発案したようです（同年九月二四日付・一〇月二日付小宮山宛柳書簡）。研究会の会則には、木喰に関わる遺跡保存や思想の普及とともに、柳の研究を援助することが会の目的であると記されています。また、常務世話人として、小宮山をはじめ柳の研究を最初から支えてきた山本節、村松志孝、雨宮栄次郎、若尾金造、野々垣那富、野口二郎ら七名の名が挙げられています。『山梨日日新聞』は、発足の日に『木喰号』と題した特集を組み、大々的に報じています。研究会の援助を受けて、柳の木喰研究はますます進展していきました。その様子は研究会誌として発行された『木喰五行上人の研究』に研究経過報告などととともに紹介されています。



柳による丸畑調査時の写真(大正14年頃撮影) 中央の毛皮の帽子を被っているのが柳。《山神像》を取り囲むように、人々が写っている。



日向国分寺調査時の写真(大正14年1月8日撮影) 柳とともに写っているのは『弘法大師像』と『唐獅子台』で、現在西都市歴史民俗資料館の所蔵となっている。

『木喰上人作木彫佛』の発行

大正四年（一九二五）四月以降、木喰五行研究会の主催で木喰の展覧会や講演会が開催されていきます。展覧会は、東京・山梨・京都などを会場とし、出品された木喰仏は六〇体ほどでした。こうした展覧会の開催とともに準備が進められたのが、写真集『木喰上人作木彫佛』です。

本書は同年七月三〇日に「甲種」「乙種」の二種類、それぞれ二五〇部ずつあわせて三〇〇部が発行されました。各本に柳の直筆による署名と番号が記されています。内容は、柳が執筆した「序」「凡例」「上人の一生と其遺作」と一〇四点の写真から成り、「上人の一生と其遺作」には、木喰の生涯とともに掲載写真の解説が記されています。写真には仏像だけでなく、木喰ゆかりの神社仏閣の建物や風景、書画なども含まれました。「凡例」によれば、製版は大塚工芸（美術印刷などを手がける大塚工芸社の創始者）、出版に関わる諸事は式場隆三郎（柳と交流があった精神科医）、経済的な援助は小宮山が行ったとあり、多くの関係者の尽力により本書が出版されたことがわかります。

「甲種」「乙種」は同じ内容ですが、「甲種」は綴り製本されたもの、「乙種」は表紙で、写真を一枚ずつ手にとって見られる形式に整えられました。「凡例」には「甲種」の表紙は柳自身が担当し、山梨の地場産業に関わる印伝や和紙を使ったこと、写真撮影にはできず、かきり紙を配ったことなどが記されています。

掲載写真は柳がそれまでの調査で撮り取ってきたものでした。柳は調査にカメラマンを同行しています。時には現地近くで手配

したようですが思うようにいかないことも多かったらしく、次第に信頼できるカメラマンを同行するようになったようです。

本書のどの写真を誰が撮影したかについてははっきりしていません。柳が調査で協力を得たカメラマンとして名前を挙げておられるのは、山崎静村、大塚工芸社の大塚隆、並木毅夫、野々垣那富、八代忠雄の五名です。そのうち、並木は宮崎調査、八代は新潟県小千谷・長岡・相崎・上越方面の調査に同行したようです。山崎静村は東京写真研究会のメンバーで、友人である写真家・野島康三を介して柳の撮影に関わるようになったと考えられています。また、野々垣は木喰五行研究会の世話人の一人で、四国・長野・甲府・教安寺・山口島根調査に同行したことが『木喰五行上人の研究』各巻の研究報告に記されています。

柳は「日本の今迄の古作品の写し方に私は前から不満を抱いてゐた。私は私の見方を上人の作で試みたつもりである。」「（彫刻寫真配布に就て）」と述べています。調査で撮影した写真は、柳が木喰仏に注いだ篤い眼差しそのものと言えるのではないのでしょうか。

本書の発行にあたり「此出版は内容はもとより製版も装幀も他にひけをとらないつもりである。」「出版界空前の大著と云つても過言ではなからうと思ふ。」「（六號雜記『木喰五行上人の研究』第四、五号）」と柳は述べています。この言葉の通り、本書は柳の木喰研究の集大成というに相応しい存在と言えるでしょう。

柳宗悦 木喰調査年譜 ～『木喰上人作木彫佛』ができるまで～		
元号(西暦)	月	事 績
大正三年 (一九二四)	八月	新潟県佐渡方面。一〇日から佐渡に渡り、木喰堂(九品堂)を発見。この時の滞在で『九品仏』『白刻像』をはじめ、四体の仏像や多くの掛軸等を確認した。その後、柳は佐渡の郷土史家たちと連絡を取り、現地での調査は彼らの手により発展した。
	九月	栃木県鹿沼方面。二日、柳窪を訪れ薬師堂を発見、堂内に薬師三尊像と十二神将像を確認した。
	一〇月	静岡県浜松方面。三〇日、『十王像』『舞頭河婆像』などを発見。本来安置されていた十王堂は焼損の影で既に無く、像は近くの善龍院に遷されていた。
	二月	静岡県静岡・藤枝方面。一〇、二日頃、静岡泉秀寺、藤枝梅林院にて木喰仏を発見。
	一月	宮崎県西都方面。一月五日から一〇日まで九州滞在。大分県別府、豊後竹田などを経て、宮崎県西都市の国分寺を訪ね、『五智如来像』『弘法大師像』『佐土原の釈迦如来像』などを確認した。『五智如来像』の存在は、事前調査を依頼していた友人の武者小路実篤から知らされていた。
大正四年 (一九二五)	二月	香川県・愛媛県方面。八日から二日間で五日間にわたり調査を行ったが、発見された仏像は愛媛県光明寺の『如意輪観音菩薩像』と子安観音菩薩像の二体のみだった。
	三月	長野県方面。六日、茅野の社宮寺『十二観音菩薩像』、富士見法隆寺十二観音堂『善賢菩薩像』を調査。
	四月	山口県・島根県方面。二日から二日間で、一九体の木喰仏を発見した。
	七月	京都府京丹波龍泉寺。浅川巧、河井寛次郎、岡田恒二、柳兼子とともに、『釈迦如来像』『阿難像』『迦葉像』『自身像』を発見した。三〇日、『木喰上人作木彫佛』発行。



【甲種】



【乙種】



『木喰上人作木彫佛』『甲種』『乙種』(山梨県立博物館蔵) 「甲種」は70円、「乙種」は60円で販売された。『木喰五行上人の研究』に掲載された広告によると、研究会会員には特別価格での販売もなされたようである。なお、大正15年の公務員の初任給は75円だった。

木喰五行研究会発行の『木喰五行上人の研究』第1～5号(山梨県立博物館蔵) 会員名の活動の記録である「研究経過報告」「会員名簿」などが掲載され、当時の状況を物語る。いずれも縦22.8 横15.5 (cm)

【甲種】・縦51.0 横36.5 厚6.7 (cm) 【乙種】・縦51.0 横35.0 厚6.8 (cm)